

立更生は無理と判断して、トイレットペーパーに書いた破門状をわたす痛快きわまりない役をやつています。そして、頭のうすくなつた妻帯者会々たちがれ会々会長が、うやうやしく二人をもらいうけるという設定になっています。現在には研修を終えて日南市立中部病院に、出張に出ております。

(昭和五十五年卒)

を挙げたのと同じ教会で葬式もしたいという御遺族の強い御気持ちもあり、三戸家と福大第二外科教室の合同葬という形がとられた。学の内外を問わずめかけた参列者は堂に満ち溢れ、予備の部屋にもも取急ぎスピーカーを設置して臨時の会場とした程である。

三戸君は昭和四十九年四月福岡大学に若任以来食道外科を中心に数々の業績を挙げ、日本消化器外科学会特別講演や外国の国際学会での発表など高い評価を浴びており、九州地区における食道外科グループの指導者の一人であった。彼の努力により患者数も増し、治療成績も向上、葬式の日には彼の手術により一命を助かったかつての患者さんの顔もいくつも見られ、事情を知る者の涙を唆った。

学生や後輩の教育にも熱心であり、且つ医局長としての重責を荷ひ、正に獅子奮迅の活躍で、この一生の報いられる日の来るのを懸命にしていたのにこのようなことになって、誠に痛恨の極みという外はない。

今は唯安らかに眠られんことを祈るのみである。

畏友
三戸康郎君を偲んで
病理学第一 菊池昌弘

健康には自信があると語っていた三戸康郎君が正月気分のかげきから一月十六日夕、短かい闘病生活の後忽然と他界した。享年四十八歳人生の盛りである。苦しみのかたまりに眠る彼の面差しを去った安らかに眠る彼の面差しを眺め、彼との三十年に及ばんとする交友を思う時、その姿に、常に戦の先頭に立ち勇敢に戦い続ける勇士の姿が交又する。大学紛争そして福岡大学と、医療に、学問に、教育に対する信念と実力に裏付けされた核心にせまる発言は、聞かざる者も多くに共感をあたえたが、時にはその真意を誤解されることもあった。しかし深い信仰に根ざした他者への思いやりといったわりの弱さを魅きよせ、彼を中心に新らしい実を結び生れ始めた所であつた。豊饒の時を目前に殞れた彼の血は無念さと思う言葉はない。ただ三戸君の育くんだ若者達が心に刻んだ彼の教をそして志を次々と開花させ始めていることは一つのなぐさめである。

海外・国際学会研究発表

(発表者名: ①題目②学会名③開催地④年月日)

田川隆輔 (解剖学第二), 高岸直人 (整形外科) ① Thoracic Outlet Syndrome ② S.I.C.O.T. XV World Congress ③ ブラジル ④ 56.9.4

松岡雄治 (生化学第一) ① Chemical structure and immunological reactive of normal fecal antigen-1: A CEA-related antigen of small molecular size in normal adult feces. ② 9th International Society for Oncodevelopmental Biology and Medicine. ③ カナダ ④ 56.9.30~56.10.5

池原征夫 (生化学第二) ① The relationship between multiple forms and sialic acid content in rat α^1 -protease inhibitor ② "Glycoconjugates" Proceedings of the 6th International symposium on Glycoconjugates ③ 東京 ④ 56.9.20~56.9.25

桂木 猛 (薬理学) ① Presynaptic autoinhibition of purine release from vascular adrenergic nerves ② 65th Federation Meeting of American Societies for Experimental Biology ③ アメリカ ④ 56.4.16

桂木 猛 (薬理学) ① Augmentation by theophylline and clonidine of ^3H -purine release from vascular segment. ② 8th International congress of pharmacology ③ 東京 ④ 56.7.19~56.7.24

榊来和司・古川達雄 (薬理学) ① Antagonism by γ -aminobutyric acid against stimulant action of angiotensin II in cardiac sympathetic ganglia of spinal dogs. ② 8th International congress of pharmacology ③ 東京 ④ 56.7.19~56.7.24

山田勝士・古川達雄 (薬理学) ① The yawning elicited by α -melanocyte-stimulating hormone involves serotonergic-dopaminergic-cholinergic neuron link in rats. ② 8th International congress of pharmacology ③ 東京 ④ 56.7.19~56.7.24

寺崎邦生 (寄生虫学) ① American leishmaniasis brought to Japan. ② 第12回熱帯医学セミナー ③ 韓国 ④ 56.6.20

永田武明 (法医学) : ① 体組織中 LPG の検出とその意義 ② 国際法医学会 ③ ノルウェー ④ 56.6.22

八尾恒良 (内科学第一) : ① Radiological diagnosis of nonspecific ulcers of small intestine ② 国際放射線学会 ③ ベルギー ④ 56.6.22

川浪祥子 (内科学第一) : ① Intrathymic acetylcholine receptor protein and myasthenia gravis ② 12th World congress of neurology ③ 京都 ④ 56.9.24

荒川規矩男 (内科学第二) ① Formation of a new kinin [des-Pro 3]-bradykinin from human plasma protein ② 第8回国際高血圧学会 ③ イタリア ④ 56.5.30~56.6.3

五十君裕玄 (外科学第一) ① Human Cholesterol (ChM) Gallstones Dissolve as fast in Simulated "Urso"-rich Bile as in "Cheno"-rich Bile ② 82nd American Gastroenterological Association ③ アメリカ ④ 56.5.16~56.5.22

五十君裕玄 (外科学第一) ① Crystalline Cholesterol Monohydrate (ChM) Dissolves in "Urso"-rich Bile by both Liquid Crystalline and Micellar Mechanisms: A Phase Equilibria Explanation and Possible Clinical Relevance ② 82nd American Gastroenterological Association ③ アメリカ ④ 56.5.16~56.5.22

五十君裕玄 (外科学第一) ① Symposium: Physico-chemical Differences between Chenodeoxycholate and Ursodeoxycholate on the Gallstone Dissolution ② 4th International Conference on Surface and Colloid Science ③ イスラエル ④ 56.7.5~56.7.10

高岸直人 (整形外科) ① Treatment for the Cuff Rupture ② Encontro Nipo-Brasileiro de Ortopedia e Traumatologia ③ ブラジル ④ 56.8.24

金岡 毅・松岡 功・清水 博・田口 星・白川光一 (産科婦人科学) ① Biochemical Fetal Monitoring ② 第8回アジア・オセアニア産婦人科学会 ③ オーストラリア ④ 56.10.29

海外だより

ミシガン州立大学

(解剖学教室)

喜多孝子

ミシガン州立大学はミシガン州 East Lansing にあります。大学は広大な敷地のなかに、多数の研究棟、講義棟、スタジアムや米国内・外からの留学生のためのアパート、その子供達の通う学校さらに発電所・映画館などを含み一つの町を形づくっています。建物と建物の間には緑の芝生と木々が植えられ広々とした感じがします。こちらへ着いた当座は、福岡の道路ぎわまでセマッタ家並をなつかしく感じましたが、今はこのゆったりとした感覚をたのしめます。

さて私の所属している解剖学教室は、主として哺乳動物中枢神経系における神経細胞の構造と機能を電顕および電気生理学的手法を用いて追求しています。私の仕事は、ラット脳の cell-to-cell connection とその伝達物質を固定することです。ラット断頭後、脳を取り出し尾状核を摘出し、350~450 μm の厚さの切片を作ります。その後、切片を chamber にのせ微小ガラス電極で神経細胞を探し、電気刺激や薬物などによる神経細胞の細胞内電位の変化をみています。切片法で脳神経細胞についての電気生理学的研究報告がありませんので、非常にやりがいのある仕事だと思っています。

また週に一度、解剖・生理・薬理学教室の合同セミナーがあり、主に中枢神経系の研究報告がなされます。電顕のみならず薬理学・生理学も含まれるので大変いい勉強になります。

とにかくこちらの生活を満喫しようと毎日はりきっています。

皆様の御健康と発展をお祈りします。

連絡先: Department of Anatomy
West Fee Hall Rm, 517
Michigan State University
East Lansing, MI, 48824, U.S.A.

ミシガン州立大学

(薬理学教室)

山田勝士



Life Science Building (1, 2階、内科系研究室、3, 4階、薬理学研究室)

昨年8月より Michigan 州 East Lansing にある Michigan State University の薬理学教室で研究しております。ここ East Lansing は Michigan 州都、Lansing の隣りに位置し、森と湖の多い静かな大学街です。車で Detroit まで1時間半、Chicago まで5時間の距離にあります。

この大学は1855年に米国でも一番古い農業大学として創設され、現在は16の college から成り立ち、4,300人の学生が学んでいます。大学構内は日本で考えられない程広く、縦9km、横4kmの長方形で、職員および学生25,000人が構内のアパートや寮で生活しております。また日本人も多く、職員として40人、一般学生として81人、その家族まで含めるとかなりの数になり、日本人会があります。この大学に

は世界99ヶ国から1,454人の留学生が来て、国際色豊かです。多い順にいくつか国を掲げますと、イラン (155人)、中国 (144人)、サウジアラビア (94人)、マレーシア (88人)、そして日本 (81人) ということになります。

さて薬理学教室は Chairman が Brody 教授で、古川教授も以前米国でいっしょに研究をされた先生ですが、そのもとに100人近くの人々が研究に従事しております。私は Moore 教授の研究室で視床下部——下垂体系、内分泌ホルモンの prolactin や α -melanotropin と中枢神経活動との関連について radioisotope を用いて生化学実験を行っております。この教室での研究時間は朝8時より夕方5時まで9時間ですが、日本でいう昼休みとか、コーヒーを飲みながらおしゃべりという事は全くなく、仕事の密度からすると比較にならない程高いという気がします。6時までにほとんど帰ってしまいますが、life Sciences Building の1階にある医学部学生用の部屋には曜日に関係なく夜遅くまで自習している姿が見受けられます。また図書館は夜の11時まで利用出来ます。

この Michigan でも日本製品は自動車、テレビからみそ、しょうゆ、ラーメンまであり、祖国日本の実力や良さがよくわかりますが、今は福岡大薬理で学んだ Japanese English (日本語なまりの発音しか出来ない) を活用して米国での良さを見つけ出し、こちらでの生活を楽しんでいる毎日です。しかし外気温-10℃~-20℃の冬をいかに過ごすかが当面の問題であるようです。

最後に皆様方の御健康と発展をお祈りしつつ筆をおきます。

連絡先: Department of Pharmacology and Toxicology,
Michigan State University,
East Lansing,
Michigan 48824, U.S.A.

テキサス大学

Human diabetes study center から

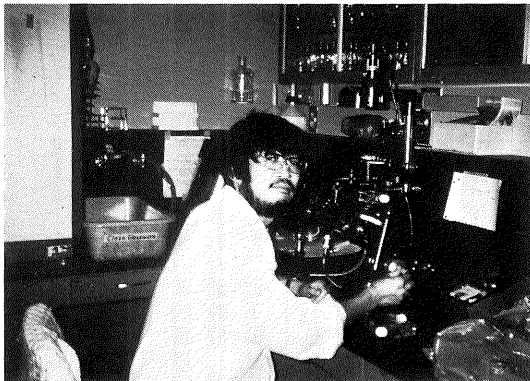
佐々木 悠

Arizona 州の capital, Phoenix に来て約1年半が過ぎました。日本では赤トンボが群をなして飛び、オミナエシの花が恥しげに咲いている晩秋を想像しておりましたが、既に11月中旬、ここ Phoenix は米国でも最も暖かい所で、つい先月まではアパートのプールで泳いでいる人を見かけました。人口70~80万、サボテンの山と砂漠に囲まれた美しい州都で、冬の間は米北部より太陽を求める多くの人がやって来て、人口は更に増加、ホテルの料金も夏と冬とは大層異なるとききます。Phoenix を少し出ますと山あり湖あり、多くの Indian Ruins に加え、National monument Parks があって、去年 Dallas から来た友人が大変うらやましがっておりました。

私はこの地にある Univ. of Texas の Human Diabetes Study Center, Roger H. Unger 教授のもとで Pima Indians を対象にした Clinical Research と Basic な culture 実験をやっております。Pima Indians と言っても御存知



Thanks GivingのHolidayにArizonaの北部をドライブしました。どこまでも続く一直線の道路にアメリカの広さを感じます。



実験室にて

ない方も多いと思いますが、Obesity と Type II Diabetes の発症頻度が著明に高い特殊な population で、米国では肥満に関する研究が内分泌・代謝学の大きな topics となり、世界中の肥満研究者が Pimas に注目しております。Indian Medical Center と共に NIH の疫学グループと National Institute of Arthritis, Diabetes and Digestive Disease section (NIADD) の Branch、及び私の所属する Texas 大学 group が中心になって Research Section をつくっており、全ての M.D., Ph.D. は何らかのかたちで Pima Indians の病態生理に関する研究に従事しています。M.D. より Ph.D. の方が多い研究機関ですが、何の Projects を始めるにしても、他の大学よりその道の authority をよんできて徹底的に discussion をやり、多くの Ph. D. が積極的に Clinical の仕事にも発言するにはびっくりしました。私の Floore には日本からの留学生が私の他の 2 人おり、皆限られた期間故か土、日もなく仕事をし、勉強しているのにもびっくりしました（但し、土、日にも出てきているのは日本人だけです）。米国に来て、日本という小さな国が、自動車産業のみならず色々な点で注目されている事を肌で感じますが、医学研究に関しては、まだまだアメリカの底力を感じている今日この頃です。

研究室の窓からばんやりと夕暮れの外を眺めていると、南西部特有の樹木が見え、夕焼がとてもきれいです。本当に愛するすべての人達にこの風景を見せてあげたい気がいたします。研究の方は、言葉の問題も含めて、なかなか思う様な Data も出ませんが、ここで得た最大の収穫は何ものにも変えがたい無形の体験であると、この留学の機会を与えて下さった奥村教授をはじめ福大の先生方に感謝しております。とにかく現在は残された滞米生活をより意義あるものという心境です。

最後に医学会会員の皆様の御健康と御活躍をお祈りし筆をおきます。

1981年11月16日

連絡先：Human Diabetes Study Center,
Univ. of Texas Southwestern Medical School
c/o Phoenix Clinical Research Section,
NIH. 4212 N.16th Street
Phoenix, AZ 85016, U.S.A.

ミュンスター大学より

(第二信)

木 田 浩 隆



病棟の医員室にて同僚のシュリューター (Schlüter) と

8ヶ月たちましたが、ドイツ語を話し、聞くことは予想以上に難しいことでした。私に面と向って話された言葉のみは、1%の語学力と99%の靈感でどうにか察知していますが、それ以外は耳元の雑音に過ぎません。

こちらの人は小話 (Witz) が好きで、誰かが新しいのを披露しては、皆ドットと沸くので、私もつられて笑うと「判った?」「イーエ」「実はね…」とゆっくり平たく話してくれて、今度は本当に笑うことが出来ます。「Dr. Kida は2度笑う」と言われる所以です。しかし毎日のように手術につき、それも6時間や8時間と言うのはザラですから、けっこう日が過ぎます。先日は12時間かかったのがありました。亀背と言って背中が丸まってしまった患者を、前と後の両側から開けて矯正する大手術です。皆、流石に疲れて術者は看護婦さんに器械を求めると覚しき手をもうろうと差し出します。「何が要るんですか?」「……」(ただ指をムニャムニャ)「それでは判りません!」すると助手の1人が「もう何でもいから持たせてやんなさい!」そんなやりとりもありましたが、出来栄は上々でした。

こちらは折々の宴会事などは一切ない代わり、個人的なパーティーは良くやっているようです。私共夫婦も、これまで7、8回ゲストとして招かれましたが、ホストとの間に死にたいほどの沈黙こそあれ、喋々と交わされる会話などはもちろんなく、こればかりは剣呑です。

ドイツ人は一体にきちんとしていて物静かです。私はまだ走るドイツ人を見た事がありません。反面、恰好をつけているようにも見えます。人間らしさをむき出しにする日本人とどちらが良いかは賛否の分かれるところでしょう。

ところで先日、日本の自動車を作るロボットがテレビで紹介されていましたが、一等工業国を自負する彼らはどんな思いでそれを見た事でしょう。

ドイツのコンピューターの8割を日本製が占めて、彼らも遂に事態の容易ならざるを悟ったと聞きます。しかし、日本がここで手をゆるめたり大きな顔をしようと言うのならそれはとんでもない誤りでしょう。彼らの生活環境、7,000kmに及ぶ Autobahn、どこをとっても絵になる街並、それと忘れてならないのは今、世界を主導する白人同志の連帯感で、こうしたものに伍するに、日本はこのまま発展しても100年はいくらくと私は思います。いずれ必ずつくであろう白人の“イチャモン”をどうしても切り抜けて、大きくなって欲しいと祖国への想いを新たにしつつ本日はこれにて失礼致します。

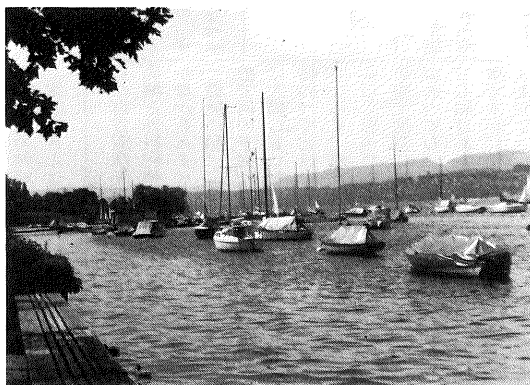
皆様方の益々の御発展を御祈りします。

敬 具

連絡先：Orthopädische Univ-Klinik
Hüfferstr. 27
4400 Münster
Germany

チューリッヒ大学

原 健 二



チューリッヒ湖

アルプスで皆様お馴染みのスイスに1年と3ヶ月程生活してきました。といっても、私の居るチューリッヒは、銀行と工業の都市で観光といえば歴史博物館、教会そして高級商店街だけしかありません。

何といっても、この国の産業は観光で、旅行者への配慮を国あげて行っているようです。たとえば、普段住民は自主的に電気、水などエネルギーを節約して使用するように心掛けねばならないのに、商店では、ウィンドウショッピングができるように店の開いていない夜は、惜しみなく店内を明々とたくさんの電燈で照らしていますし、また、清掃人も多く、マナーの悪い人の多い道路、歩道もいつもきれいにしています。私のいる法医学研究所でも、節電を厳

守せねばなりませんし、研究室の美化にも気を配っていないければなりません。

このように観光に力が入られている御陰か、この研究室にもかなりの予算があり高価な化学分析機器も少人数には十分すぎるくらい購入されて美しく研究所を飾っているようです。私はここでその高価な機器の種類であるガスクロマトグラフ質量分析装置 (GC/MS, ここには3台あります) を使って、薬毒物の鑑定、およびこの種の最新モードである Negative-CI の勉強を行っています。フランス、アメリカでは、高価な GC/MS をできるだけ有効に使用できるよう Negative-CI などの開発が進んできているのに、エレクトロニクスの方で世界に定評のある日本がこの方面でかなり遅れてしまっていることに、私も日本人として残念に思っています。

今日、チューリッヒ市内では、初めての雪が降っています。私のシェフも、私にこの冬こそは、スキーに挑戦してみないか、もちろん滑走は危いから安全で健康に良いクロスカントリーの方が良いと言ってくれますので、寒さの嫌いな私も今度は、親善のためにスキー具でも買って行こうかと考えています。

最後に皆様方の益々の御発展をお祈りしつつ筆を置きます。

連絡先：Gerichtlich-Medizinisches
Institute der Universität Zürich
Postfach, 8028 Zürich
Switzerland

カリフォルニア大学

村 松 和 彦

カリフォルニアパークレーにあるカルフォルニア大学の本校正門近辺
拜 啓

カルフォルニア大学の多数の分校のうちサンフランシスコ分校に来て5ヶ月になります。サンフランシスコはアメリカ国内でも日本人観光客やビジネスマンの多い所だろうと思います。日本人学校には600人もの生徒がおり、いたるところで日本人に出会います。トヨタ・日産・ホンダなどがわがもの顔で走っており、商工会議所の幹部がこちらに会議に来て、米国はもっとしっかり商売して下さい、などのごことを言うあります。

しかし一旦大学に入って病院の様子、研究施設等をみると、日本のいかにアンバランスかをつくづく感じます。

小児科だけで professor が33人、clinical professor が15人いて、どのような小さな部門のカンファランスでも2~3人の professor が出席していて、お通夜みたいなカンファランスは絶無です。小児科だけで年間発表原著、単行本(含分担執筆)は200編を超えています。

未熟児新生児施設について言えば、intensive care nursery (ICN) のベッドが27あり、これが high intensive care 6, low intensive 6, intermediate 7, recovery 8, とわけられていて high intensive の場合は昼夜とも患者1人に看護婦1人がつくという手厚さ。医師は ICN を8名でみています。

この人的資源の豊かさにはとうていたちうちできないなと感じるこのごろです。

1981年12月

連絡先：1270-7 th ave. #1.
San Francisco, CA. 94122
U.S.A.

